

ロワール渓谷：シュリー・シュル・ロワールからシャロンヌまで

～ 時代を遡ってレオナルド・ダ・ヴィンチの作品を考察します。～



レオナルド・ダ・ヴィンチ



クロ・リュセの館

ロワール渓谷周辺は、パリからのオプションツアーで行くことができます。もちろん列車で行くこともできますが、効率良く巡るなら、オプションツアーをお勧めします。この人気のあるロワール古城には、シュール川に立つシュノンソー城、らせん階段で有名なシャンボール城、ダ・ヴィンチが招かれたアンボワーズ城など、見どころがたくさんあります。その中でも、アンボワーズ城を訪れるコースが魅力的です。なぜなら、ダ・ヴィンチが最後の3年間を過ごした、クロ・リュセの館（アンボワーズ城に隣接）を見学するからです。ダ・ヴィンチの足跡を感じ取れるフランスで唯一の場所なので、ぜひ行かれてみてはいかがでしょうか。また、今年は「ダ・ヴィンチ没後500年」です。アンボワーズでは様々な式典が催され、世界各地でダ・ヴィンチにまつわる展覧会が開かれています。

誰もが知るダ・ヴィンチの代表作と云えば、『最後の晩餐』、『モナ・リザ』、『聖アンナと聖母子』でしょう。この3作品なら、絵画ファンでない方でもご存知のことかと思えます。しかし、それ以外の作品は、あまり思い浮かばないのではないのでしょうか。ダ・ヴィンチは67年の生涯(1452～1519年)を全うしましたが、現存する真作（デッサンなどは除く）は多くても20点ほどです。これって、少なすぎると思いませんか。同じルネサンス期に活躍したポッティチェリやラファエロは代表作だけでも、優にその倍はあります。職業が多岐に及び、作品制作に充てる時間が持てなかったのか、本当はもっとあったが遺されていないのか……。たったの20点、私にはこのことが一番の謎です。また、代表的な3作品以外は、我々がイメージするダ・ヴィンチ作品とは、少し趣を異にしていることもまた、謎なのです。

まずは、ダ・ヴィンチの真作とされる油彩画・テンペラ画の主な17作品を、3つの時期に分けてまとめてみました。

●20代の頃：成長期の作品

1. 『キリストの洗礼』（1472～75年頃）
2. 『受胎告知』（1472～75年頃）
3. 『ジネーヴラ・デ・ベンチの肖像』（1474～80年頃）
4. 『ブノアの聖母』（1478～80年頃）
5. 『カーネーションを持つ聖母』（1475年頃）
6. 『聖ヒエロニスム』（1480～82年頃）
7. 『東方三博士の礼拝』（1481～82年頃）

●30～40代：充実期の作品／1482年から約17年間、ミラノに滞在

8. 『岩窟の聖母』（1483～86年頃）
9. 『音楽家の肖像』（1485年頃）
10. 『白テンを抱く貴婦人』（1490年頃）
11. 『リッタの聖母』（1490～92年頃）
12. 『ミラノの貴婦人の肖像』（1490～96年頃）
13. 『最後の晩餐』（1495～98年頃）



『最後の晩餐』

●50代以降：円熟期の作品／1500年にフィレンツェ、その後、ローマ、フランスに移住

この時期に、ダ・ヴィンチの画風が確立されてくる。

14. 『モナ・リザ』（1503～07年頃）
15. 『聖アンナと聖母子』（1508～10年頃）
16. 『サルバトール・ムンディ』（制作年不明、1500年前後）
17. 『荒野の聖ヨハネ』（1510～15年頃）



『モナ・リザ』

上記のように、20代の頃の成長期、30～40代の充実期、50代以降の円熟期の3つに分けました。

次に、各時期の代表作を、時を遡りながら考察してみたいと思います。

15. 『聖アンナと聖母子』（1508～10年頃）／54～56歳頃の作品



『聖アンナと聖母子』

ダ・ヴィンチ作品の特徴である「スフマーチ（ぼかし）」や微笑みかけた表情、背景の遠近法を駆使して描かれた風景などが、見られます。この作品はたいへん素晴らしい構図です。聖アンナと聖母子の目線が、ほぼ一直線上になっています。幼子イエスの抱くヤギも、一直線上にあります。目線に加え、手前の聖母マリアの右腕と右足、幼子イエスの右手が画面の左上から右下の向かっていて、また、上の聖母マリアの顔と画面下の足元からヤギまで、三角形の構図で、これが、画面全体に安心感をもたらしているのです。かなり精度の高い作品に仕上がっているのがわかります。聖母マリアの肩幅が広いことが少し気になりますが、とても神聖な感じがでていて、それほど違和感は覚えません。



『白テンを抱く貴婦人』

10. 『白テンを抱く貴婦人』（1490年頃）／38歳頃の作品

この作品は、我々がイメージするダ・ヴィンチ作品とは、少しタイプの違う作品のように感じます。色調が他の作品と異なり、メリハリがあり鮮やかで、輪郭線を感じさせる絵なのです。特に、瞳の輪郭線がはっきりしています。また、首から左肩にかけて、なだらかな過ぎるのも、気になります。人体の骨格や構造を理解していたダ・ヴィンチが、不自然な肩のラインを描いたことに、疑問が残ります。と同時に、

ダ・ヴィンチらしさも感じられます。それは、白テンの繊細なひげや毛並みなどです。ダ・ヴィンチが左利きだったことはよく知られていますが、ひげや毛並みがかなり細い線で正確に右から左にスッと流れていて、左利きの力の入り方が伝わってきます。左利きの作家による作品であることも、真作の決め手のひとつとなったようです。

当時のレオナルド・ダ・ヴィンチは、「空間に輪郭線は存在しない」と気づいていたにもかかわらず、なぜ輪郭線を描いたのでしょうか。輪郭線が無い方が、科学的には正しい。科学者視点で物事を捉えていたダ・ヴィンチにとって、そこは譲れないところだと思うのですが、なぜ妥協してまで描いたのか、私は不思議に感じるのは、エックス線や顕微鏡などによる調査結果がありますので、ダ・ヴィンチ作品に間違いはないのでしょうか。ただ、どことなく違和感を覚えるのは、私だけでしょうか。

3. 『ジネーヴラ・デ・ベンチの肖像』 (1474~80年頃) / 22~28歳頃の作品



『ジネーヴラ・デ・ベンチの肖像』

この絵も、代表作の3作品と比較してみると、描き方が少し異なるような気がします。というのも、この絵にも、スマートが感じられません。背景として、人物の真後ろに樹木や葉を描いていますが、色調が髪の毛と同化していて、頭上に覆いかぶさってくるような感じを受けます。良い構図とは言い難いです。樹木の形も曖昧で、唇の描き方も少し淡泊に見えます。ダ・ヴィンチ作品の特徴として、人物をどことなく「穏やかな表情」に仕上げる人が多いのですが、この作品は「かなり硬い表情」をしています。我々のイメージするダ・ヴィンチ作品とは、受ける印象が異なります。ルネサンス期の画家たちは、自身のこだわりを捨て、依頼者の意向を汲み取って描くことを重要視しましたが、ダ・ヴィンチは、汲み取りつつも、科学的な観点を優先させることが多かったのでしょうか。依頼者と作家の両方

の思惑に挟まれたこの絵は、はたして、ダ・ヴィンチ自身の完成作品といえるのでしょうか。ダ・ヴィンチ作品は『モナ・リザ』が突出して有名なので、どうしても「モナ・リザ=ダ・ヴィンチ作品の基準」と捉えてしまいがちですが、『モナ・リザ』は1503年以降、ダ・ヴィンチが50歳の円熟期を迎えてからの作品です。ダ・ヴィンチ作品を知るには、時代ごとに、どのようなスタイルの絵を描いていたかを把握する必要があります。それは、画家が時代とともにスタイルを変え、成長していくからです。

時代を追って考察した上記の3作品について思うことは、20代~40代にかけての絵の作風には「一貫性」が感じられないことです（悪い意味ではありません）。ボッティチェリやラファエロは、30代の頃に既に、それが作家自身と分かる絵を描いています。つまり、「自分の画風」を確立していたのです。対してダ・ヴィンチは、自分の作品を特徴づける個性があまり発揮されていないような気がします。20~40代の頃のダ・ヴィンチは、様々な描き方をされていて、科学で云うならば、研究段階だったのでしょうか。ダ・ヴィンチが「自分の画風（我々がイメージするダ・ヴィンチの画風）」を確立したのは、50代になってからです。独自性が確立しないと、なかなか良いパトロンとも巡り逢えません。そういう意味で、ダ・ヴィンチは遅咲きであって、本当の意味で開花したのは、フランスに渡ってからだと思います。

そもそもイタリア人のダ・ヴィンチが、なぜフランスに渡ったのか、疑問に思いませんか。しかも、1516年から亡くなるまでの晩年3年間と、短いのです。イタリアを離れた時、ダ・ヴィンチは64歳。当時はローマで生

活していましたが、老齡を迎えたダ・ヴィンチに居場所はなく、また、パトロンにも恵まれず、断腸の思いでローマを去ったのです。ちなみに、親しみやすい性格であったポッティチェリとラファエロは、周囲からも受け入れられやすく、パトロンにも恵まれていました。ダ・ヴィンチは、フランス王フランソワ1世の招きでアンボワーズに移り住んだわけですから、フランソワ1世は、ダ・ヴィンチにとっての恩人と言えるでしょう。晩年になってようやく「人生最大のパトロン」に出逢ったのです。彼は確かに高名であったものの、イタリアでは最後まで、メディチ家に見込まれたミケランジェロのように、権力者の運を得ることができませんでした。もしフランソワ1世と巡り逢えなかったら、『モナ・リザ』は後世に遺されなかったかもしれません。天賦の才能はあったにせよ、頑なで世渡り上手とは言えなかった作家の姿が、窺えます。

そして、『モナ・リザ』に最期まで筆を入れ続けたというエピソードに、私はダ・ヴィンチらしさを感じています。これには大きな意味があります。つまり、作家が成長し続けている、進化し続けているということだからです。もし、『白テンを抱く貴婦人』を描いた30代で、「自分の画風」に折り合いをつけてしまったなら、そこで才能は止まっていたでしょう。「白テンを抱く貴婦人＝ダ・ヴィンチ」と帰結したら、他の画家たちに埋もれてしまうかもしれません。立ち止まらずに模索し続けた、天才レオナルド・ダ・ヴィンチ。ミケランジェロもそうであり、時代を経て、モネやピカソもそうだった。最期まで探求心を失わずに進化し続けることが、偉大な芸術家たる証なのだと、私は思います。

沼田政弘